

DX CATALOG

現場の声から生まれた
DXの第一歩

edigsy



“現場主導”もたらす 新しい価値創出のかたち。

「もっと働きやすくしたい」
——その思いが、株式会社digsyのDXを動かしました。

digsyは、障がいのある社員が多く働く特例子会社です。
けれど、ここにあるのは支援ではなく、同じ目線で考え、協力しながら前へ進むチームの力です。

日々の仕事では、「誰がどこまで進んでいるのか」が分かりづらく、
確認や報告に多くの時間がかかっていました。
そんな中で、「アプリで見られたら便利かも」という小さな声がきっかけに。

社員たちは自分たちの手で改善の方法を考え、少しずつ形にしていきました。

試行錯誤を重ねてできあがった“見える化”の仕組みは、情報共有をスムーズにし、チーム全体の動きを大きく変えました。
効率が上がっただけでなく、社員一人ひとりが自分の仕事に責任とやりがいを感じながら働けるようになったのです。

この広報誌では、そんなdigsyの“現場から生まれたDX”の取り組みを、スタッフ自身の言葉で紹介しています。

一人ひとりの気づきとチームワークがつないだ、新しい働き方の物語を、ぜひご覧ください。





目次

第1章

THE BEGINNING

現場から始まるDX。

digsyが目指す「誰も置き去りにしない改革」。

第2章

BEFORE：見えなかった現場

担当も進捗も不明。

アナログ管理が抱えていた課題。

第3章

AFTER：アプリ導入で変わったこと

業務の見える化で、現場が動き出した。

数クリックで完結するリアルタイム管理。

第4章

BEHIND THE SCENES：Geminiで動くDX

Geminiでつくる現場発DX。

コードレスで“使える仕組み”を実現。

第5章

FUTURE：digsyが目指す次の一歩

業務効率化のその先へ。

人が主役のDXを文化に。

現場から始まるDX

digsyが目指す「誰も置き去りにしない改革」

“現場の違和感”から始まった変化

日々の業務に追われながら、「この作業、本当に必要なのだろうか？」と感じる瞬間がありました。

全員が紙やスプレッドシートで進捗を管理し、それを見比べて判断する。

感覚と記憶で認識がずれることも当たり前でした。そして、案件やメンバーが増えるにつれて、その歪みが徐々に大きな課題に発展しました。

「誰がどこまで進んでいるのか」

「連絡は届いているのか」

現場全体の動きを把握する方法がなかったのです。

「現場の声」がDXの原点に

そうした現状を変えるきっかけとなったのが、“現場の声から生まれるDX”という発想でした。

「アプリで見られたらいいのに」という ささやかな一言が、改善への第一歩になりました。

関数や自動集計を組み合わせながら、少しずつ見える仕組みを形にしていく。

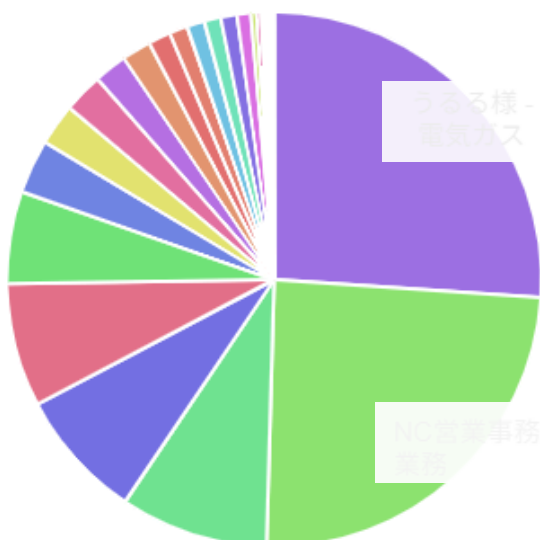
初めて進捗がリアルタイムで見たとき、メンバーから自然に「便利ですね」「これ助かりますね」と声があがりました。

数字や色で状況が見えることで、想像以上にチームの一体感を生んだのです。

この取り組みは、単なる業務効率化ではなく、現場の“気づき”から始まる文化の変化でした。

digsyが目指すのは、誰も置き去りにしない「見える安心」を育てるDX。

これは、digsyが“見えない不安”を解きほぐすまでの、最初の一步でした。



うる様 - 電気ガス	26時間 1分
SNS更新	22時間 53分
AIマッチングスカウト	17時間 55分
経営企画部 - ニュース配信	14時間 21分
受電業務	13時間 52分
JM - 帳票	12時間 59分
面接	12時間 44分
YOZBOSHI	10時間 50分
うる様 - アンケート調査	4時間 42分
LLM計画	3時間 37分

第2章 BEFORE

見えなかった現場

現場の努力は見えているようで、実は誰にも共有されていなかった。
これは、digsyが「見える安心」を目指し始めた原点の記録である。

属人化と情報の断絶

当時の現場では、日々のタスクをこなすことが最優先となり、進捗や担当状況を正確に把握する仕組みがほとんど存在していませんでした。

依頼や報告はチャットや口頭で行われ、担当者によって情報の頻度も異なりました。

その結果、「誰がどの案件を担当しているのか」「どこまで完了しているのか」が曖昧なまま業務が進む状態が続いていました。

また、全体を俯瞰できる管理の仕組みもなく、現場の動きは“点”のまま。

“見える人にしか見えない”構造

管理者は各メンバーの状況を個別に確認しながら、進捗を感覚的に判断するしかありませんでした。

属人的な判断が重なることで、同じ内容を複数人が対応してしまったり、逆に誰も着手していない案件が生まれることもありました。

こうした状況では、現場も管理者も「なぜ滞るのか」が把握できず、報告や調整のやり取りが増える一方。

確認にかかる時間が積み重なり、対応スピードが次第に落ちていきました。

効率化を阻んでいたのは、作業そのものではなく“情報の見えなさ”そのものでした。

日々のやり取りが重なっていくうちに、現場のあちこちで、少しずつ“情報の断絶”が生まれていきました。

属人化と判断のばらつきは、業務効率だけでなくチーム全体の動きにも影響しました。

メンバーの努力は確かに存在していたものの、それが共有される仕組みはなく、数字として見えることもありませんでした。

「どこまで進んでいるのか」「誰が担当しているのか」といった確認が習慣化し、結果として業務のスピードが落ちていきました。

やがて“見える人にしか見えない”状態が定着し、一部の人に情報が集中する構造が生まれていったのです。

この「見えない現場」を変えること。

それが、digsyのDXを始動させた最初の動機でした。これは“改善”ではなく、“変革”への第一歩だったのです。

アプリ導入で変わったこと

業務の見える化で、現場が動き出した。
数クリックで完結するリアルタイム管理。

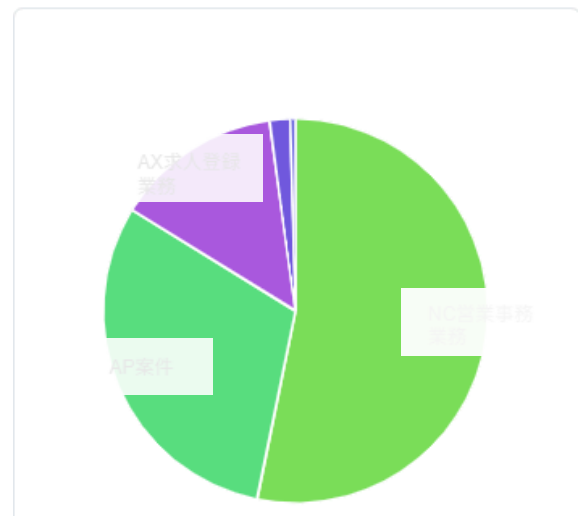
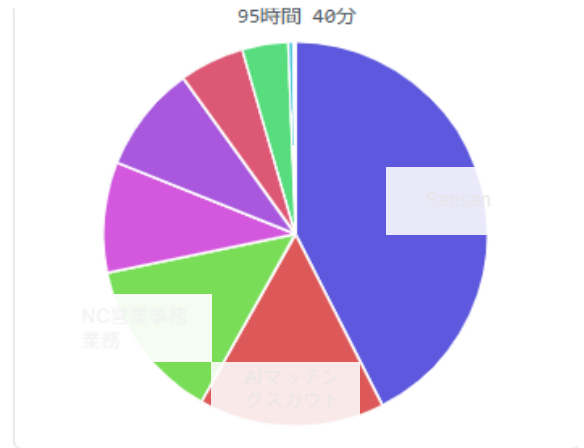
“確認の速さ”が変えた日常

アプリ導入の効果は、劇的な変革ではなく、日々の業務の中で静かに積み重ねられた“確かな変化”から始まりました。

最初が変わったのは「確認の速さ」です。

以前は報告がチャットや記録表を経由しており、進捗確認に時間がかかっていました。

今ではボタンひとつで全体の状況を一覧化でき、誰でもリアルタイムで進捗を把握できます。



見える化が生む好循環

数字として状態が見えることで、報告を待たずに次の判断が可能になり、メンバー間の認識差も減少しました。

業務のリズムが揃い、報告や確認に費やす時間も削減。

管理者が頭の中で持っていた全体像が、チーム全体で共有されるようになりました。

個々の動きが見えることで、次取るべき行動が明確になり、“見えることで動き出す”好循環が生まれたのです。

2025/06/09	月曜日	39:45:00	0:30:00	7:00
2025/06/10	火曜日	36:15:00	0:30:00	5:45
2025/06/11	水曜日	50:00:00	3:45:00	7:45
2025/06/12	木曜日	43:30:00	7:50:00	5:40
2025/06/13	金曜日	35:00:00	0:45:00	7:00
2025/06/14	土曜日	2:00:00	0:00:00	4:30
2025/06/15	日曜日	2:00:00	0:00:00	4:30
2025/06/16	月曜日	37:15:00	0:00:00	8:20
2025/06/17	火曜日	41:45:00	3:15:00	5:25
2025/06/18	水曜日	38:30:00	9:30:00	9:30
2025/06/19	木曜日	38:45:00	4:00:00	4:45
2025/06/20	金曜日	45:45:00	1:45:00	4:45
2025/06/21	土曜日	1:45:00	0:00:00	3:45
2025/06/22	日曜日	1:45:00	0:00:00	5:35
2025/06/23	月曜日	43:15:00	1:30:00	6:50
2025/06/24	火曜日	34:00:00	6:15:00	4:00
2025/06/25	水曜日	40:40:00	4:15:00	4:30
2025/06/26	木曜日	42:00:00	11:00:00	3:40

※↑実際の管理画面の一部（抜粋）

アプリ上のデータ蓄積により、感覚的に語られていた作業負荷や工数が、数字として可視化されるようになりました。

DXとは、単に技術を導入することではなく、日々の意思決定が変わること。

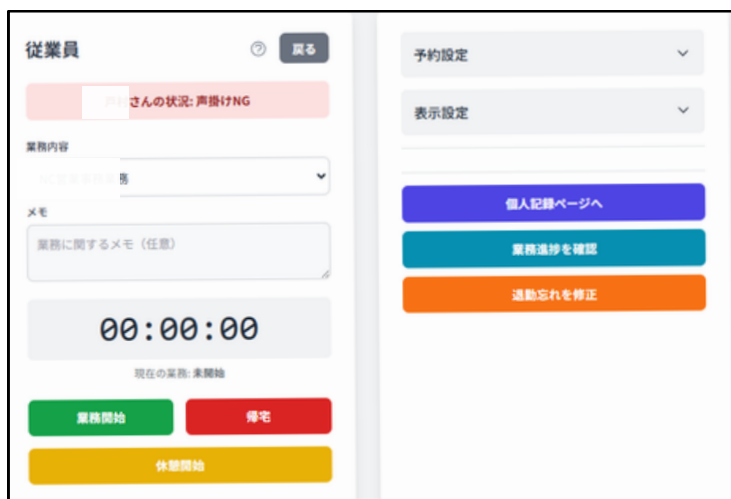
digsyの現場は、その第一歩を確かに踏み出しました。

※旧管理管理シートの一部（抜粋）

第4章 BEHIND THE SCENES

digsyの見える化を支える仕組み

“見える化”を支えるのは、現場の声と、数字に寄り添うこの仕組み。



業務管理アプリ画面①

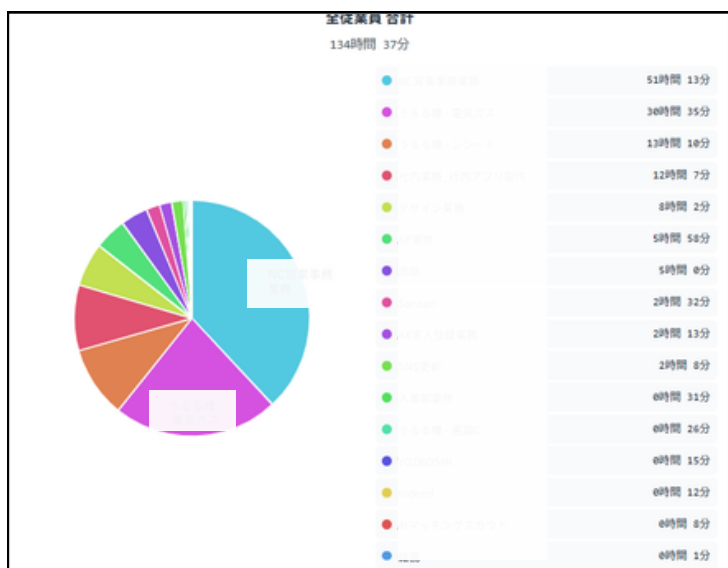
従業員がアプリを起動すると、プルダウンで担当する業務を選択できるようになる。同じ業務に関わっている人をリアルタイムで確認することができ、処理時間の記録も自動化。

管理者として起動すると、配置の少ない業務・多い業務が見える化され、配置転換が容易になる。

業務管理アプリ画面②

管理者用画面。ワンクリックで稼働時間を確認できる。

時間請求業務の売総チェックが、複雑な計算なしでスムーズに行うことができる。



業務管理アプリ画面③

業務ごとにピボットテーブルの作成が不要で、個人・全体の処理件数を把握。時間がかかる工数や依頼の多い作業も見える化し、業務状況を簡単に把握できる。

Geminiで動くDX

業務効率化のその先へ。人が主役のDXを文化に。

現場が主役の仕組みづくり

digsyのDXは、Geminiによって“現場が自ら仕組みを作る文化”として動き出しました。

コードを書く前に、課題に合わせた仕組みを自分たちで形にできる。

それは単なる効率化ではなく、「現場が主役になる」変化でした。

「共創のプラットフォーム」 としてのGemini

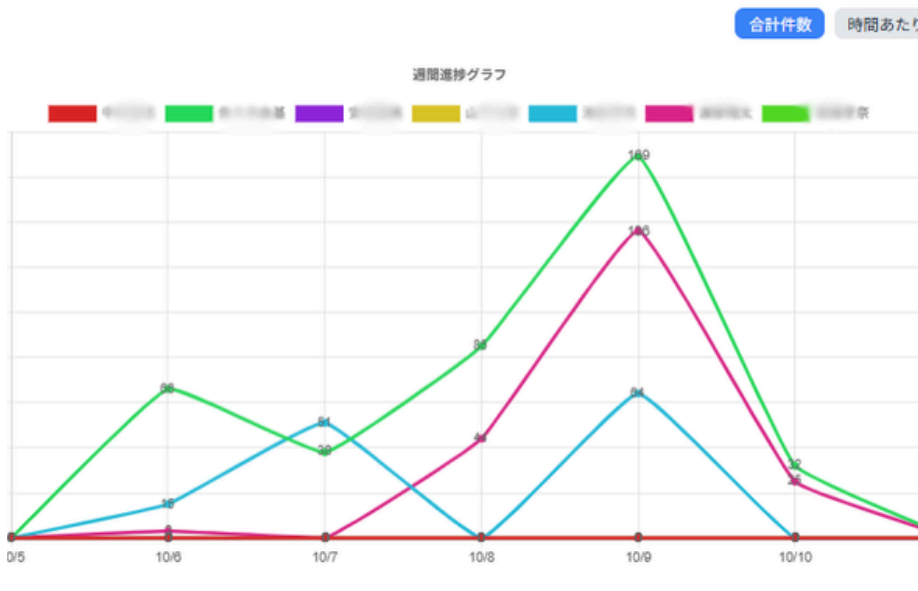
Geminiによるアプリ構築は、「どうすれば今日から使えるか」を基準に、現場の声を拾い上げながら進められました。

ボタンひとつで進捗を一覧化し、色と数字で状況を見えるようにする。その仕組みづくりの中で、digsyの“見える安心”が形になっていったのです。

開発の過程では、管理者もメンバーも同じ画面を見ながら議論を重ねました。

「こんなふうに見たい」「こうしたい」という声、仕様そのものを育てていく。

Geminiはツールではなく、“現場のアイデアを形にする共創のプラットフォーム”。



←Gemini構築による集計グラフ

仕組みが形になるたびに、「自分たちで変えられる」という自信が生まれ、チーム全体の改善文化が自然に広がっていきました。

digsyの現場は、その一步を確かに踏み出したのです。

第5章 FUTURE digsyが目指す次の一步

そして、この一步が次の誰かの挑戦へとつながっていく。
その連鎖こそが、digsyの描く“共に進化するDX”である。

“終わりのない改善”から “続いていく文化”へ

digsyのDXは、「終わりのない改善」から「続いていく文化」へと進化しようとしています。
アプリ導入によって、業務は可視化され、効率化は当たり前となりました。

“仕組みを作る人”を育てるDXへ

しかしdigsyのDXは、単なる“効率の向上”ではなく、“仕組みを作る人”を育てることにあります。
そこにあるのは、digsyではデジタルと人の力をつなぐという信念です。

それは、誰か一人の発想から生まれるのではなく、日々の業務の中で生まれる小さな声の積み重ねから形づくられてきました。

Geminiを使った改善は、もはや一部の人のものではなく、現場の創意が新しい仕組みを生み出す流れが根づいています。

それが、digsyの描く“共に進化するDX”の姿です。
これからも、“見える化”は終わりではなく、はじまりの約束。

digsyの挑戦は、これからも現場と共に進化し続けます。



“共に進化し続ける、それがdigsyのDX。”

編集後記

私たちの手で綴る、digsyの今

この広報誌に綴られたストーリーは、決して特別な誰かの挑戦ではありません。

日々の業務のなかで、「少しでも良くしたい」という気づきを重ねてきた、私たちdigsyスタッフ一人ひとりの歩みを記録したものです。

今回の制作では、外部のライターやデザイナーに頼ることなく、文章の構成からデザイン、取材、執筆まで、すべてを社内メンバーが担当しました。

現場で感じた“リアルな空気”をそのまま言葉にし、自分たちの言葉で「digsyの今」を伝えたい——その思いが、この記事の出発点でした。

記事をまとめながら感じたのは、DXやAIといった先進的な取り組みの裏には、常に“人の努力と工夫”があるということです。

便利さを追い求めるだけでなく、誰もが安心して働ける仕組みをどう作るか。

その試行錯誤こそが、digsyらしい成長のかたちだと改めて感じました。

また、今回の制作を通して、改めて「伝えること」の意味を考えました。

データや成果だけでは伝わらない“変化の温度”を、どうすれば言葉とデザインで表現できるのか。

メンバー同士で何度も話し合い、磨き合うなかで、“現場が主役のDX”という私たちの原点を再確認する機会にもなりました。

この広報誌が、読んでくださる方々にとって、digsyの挑戦を知るだけでなく「現場から生まれる価値とは何か」を考えるきっかけになれば幸いです。

そして何より、この誌面づくりそのものが、私たちにとっての“ひとつのDX”であり、“共に進化する文化”の証でもあります。



企画: 株式会社digsy

執筆: 堀江 倫子

編集: 株式会社digsy

校正・校閲: 市原 博晃/戸村 仁美

デザイン: 堀江倫子 / 中村理緒

digsyへ相談してみる

▼ ご相談フォーム



株式会社digsy

011-223-2200

digsy.co.jp

digsy@neo-career.co.jp

北海道札幌市中央区南1条西2-5 南1条Kビル7階

データ処理をはじめ、
バナー制作・記事作成まで幅広くお手伝いできます。

小さな相談でも問題ございません。
できるかも？と思ったらご相談ください。